

# 北朝鮮の変化と北東アジア

三村光弘  
(ERINA)

## 冷戦の終了と北朝鮮

- 北朝鮮と米日との関係改善と安全の確保は1990年代初めの東西冷戦崩壊時に行われるはずであった
  - 実際には、韓国はソ連や中国と国交正常化したが、北朝鮮は米日との国交正常化を行うことができなかった(1991年～92年の日朝国交正常化交渉、92年の憲法改正)
  - それどころか、旧ソ連や中国といった後ろ盾を失ったまま、米国単独覇権の時代に米国と対立せざるを得なかった
- その結果が、核、ミサイル開発の加速

## 冷戦の終了と北朝鮮

- 旧ソ連・東欧の社会主義政権の崩壊と社会主義世界市場の喪失
  - 1995～97年、天災の連続と飢餓の発生（96年～2000年「苦難の行軍」）
  - 国家が国民生活を支えるシステム（配給）の崩壊と生活を支えるための民間経済活動の急速な拡大
- 1998年 経済改革の開始（憲法改正）

## 冷戦の終了と北朝鮮

- アジアの社会主義国、社会主義経済を標榜する国々における経済改革、市場化の進展
  - 中国、ベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマー等。
- 北朝鮮はこの流れから取り残されていた
  - 1990年代後半～2000年代半ばの経済改革の試みと挫折
  - 2013年以降、遅ればせながら、世界の趨勢に乗り始めたように見える
  - 北東アジアにおける冷戦の残滓がなくなる兆し

## 2000年代の北朝鮮

- 核開発
  - 2006年、09年の核実験
  - 2006年、09年のミサイル発射実験
- 経済改革
  - 「実利」を優先する発想の導入
  - 2002年7月の「経済管理改善措置」
  - 2003年の「総合市場」(現在は「地域市場」)設置
  - 国営部門と非国営部門の関係の深化
  - 2006年頃から引き締め、09年11月に貨幣交換

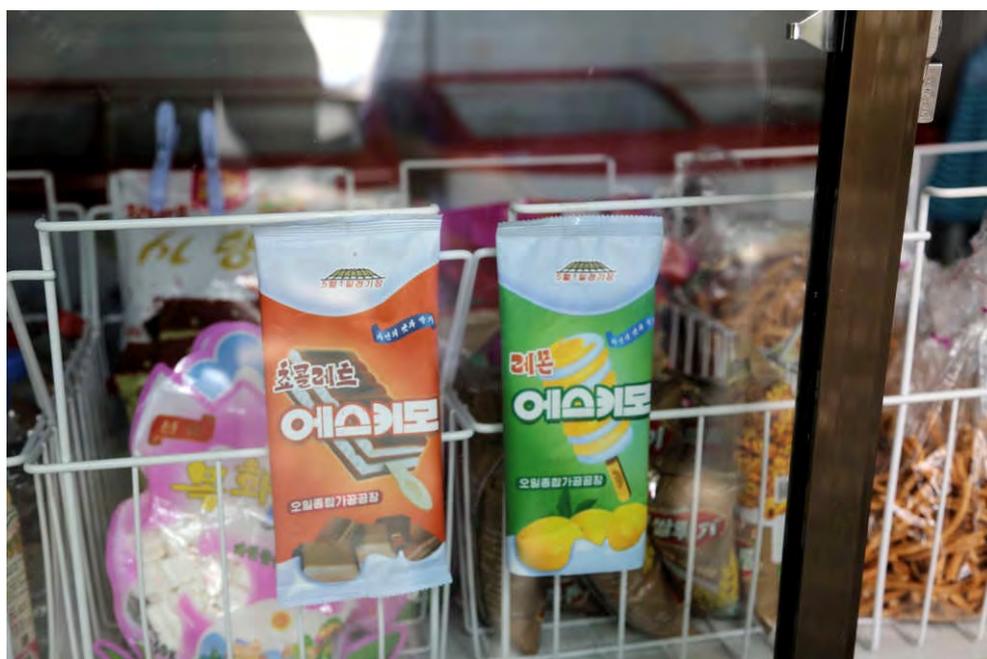
## ここ10年来の北朝鮮の行動

- 核開発
  - 米国との対立から、核兵器とその運搬手段の開発に注力→2013年3月には「経済建設と核武力建設の並進路線」(~2018年4月)
- 経済改革
  - 2009年11月末の貨幣交換の失敗を直接の契機とし、2010年から「人民生活の向上」を朝鮮労働党と国家の重要な任務とするように
  - 2013年「社会主義企業管理責任制」
    - 計画権、生産組織権、価格制定権、貿易権等々
    - 国家指標と企業所指標→国営企業同士で注文契約制

## 国民生活の向上

- 国民が生活の向上を肌で感じることができることが重要な指標となっている
  - 主食(コメ、トウモロコシ、ジャガイモ等)の国内生産の増加←石炭化学工業による化学肥料国産化
  - 軽工業、食品の分野での国産品の増加
  - さまざまな分野における現代的な文化生活＝クールな国になろうとする北朝鮮

## 国産アイスバー



## 国産菓子類



## 国産あんパン



# 国産ランチョンミート



# 金カップ体育人総合食品工場



# 金カップ体育人総合食品工場



## 5/1 総合加工工場製のゼリー



## 市内の外貨食堂



## 自転車に乗る男性



## 光っている靴



## 最近はやっている 高麗航空のサイダー(多角経営)



# 平壤の街角で



# 平壤の自然博物館



## 平壤の自然博物館



## 米国におけるトランプ政権の誕生 と朝鮮半島の情勢変化

- 大統領選挙時から、北朝鮮との対話を構想
  - 就任後に一度試すも、反対が多く頓挫
  - 2017年に戦争の危機→韓国の行動を誘発(光復節演説)→平昌オリンピックへの誘致と「仲介外交」。
  - 2017年夏～秋(11月中旬)が最も緊張
  - 北朝鮮の国家核武力完成宣言(11月29日)
  - 韓国は、12月末にオリンピック・パラリンピック期間中の米韓合同軍事演習延期を提起

# 昨今の北朝鮮の変化

- 核開発の加速→国家核武力完成→非核化
  - 2016年1月、9月、17年9月の核実験
  - 激化するミサイル発射
  - 2017年11月29日大陸間弾道ミサイル「火星(ファソン)15」発射と「核武力完成の歴史的大業」実現
  - 2018年4月20日、朝鮮労働党中央委員会第7期第3回総会
    - 「経済建設と核武力建設の並進路線」が役目を終えて終了→決定書「革命発展の新たな高い段階の要求に即して社会主義経済建設に総力を集中することについて」
    - 決定書「科学教育事業において革命的転換をもたらすことについて」

## 2018年の変化

### (カッコ内は首脳会談の回数)

- 米朝: 米国の先制攻撃一歩手前から、中長期的な関係改善を約束するパートナーへ(1回)
- 南北: 10年の遠回りを経て、再び「敵からライバル」への関係改善と信頼醸成へ(3回)
- 中朝: 金正恩政権初期の不仲から、伝統的な関係に基づく連携の復活へ(3回)
- 口朝: トップ外交に入りつつある気配も、まだ果たせず(0回)
- 日朝: 変化の趨勢に乗り遅れる(0回)

## 2019年の上半期に考えられる動き

- 米朝: 第2回朝米首脳会談と非核化の具体的内容での初歩的な合意
- 南北: 金正恩ソウル訪問と南北間シャトル「外交」の継続、開城、金剛山等のプロジェクト復活への準備
- 中朝: 非核化推進の前提下での習近平の平壤訪問。朝米交渉における「保険」の役割。
- 口朝: 朝ロトップ外交の開始
- 日朝: 変化の趨勢に乗り遅れる

25

## 非核化を前提として 各国ができる対応

- 米国: 朝鮮戦争の休戦協定の平和協定化、米朝国交正常化の推進の意思表示
- 中国+ロシア: 北朝鮮を新たな地域、国際秩序に組み込むための協力
- 中国: 北朝鮮の経済改革推進や対外経済関係強化のための知的基盤整備
- 韓国: 信頼醸成の深化とそれにとまなう軍縮(双方にメリット)、南北間の実質的な関係正常化(統一へと向かう前提での暫定的な分断の固定)
- 日本: 北朝鮮との外交関係の樹立、北東アジアのアクティブなメンバーとなるための知的、精神的準備

26

## 非核化の進展を前提として 各国ができる対応

- 米国: 国連安保理決議による国際的制裁や米国をの単独制裁緩和や解除
- 中国+ロシア: 国連安保理における国際的制裁の緩和や解除の推進
- 中国: ハードインフラを含む各種投資
- 韓国: 開城、金剛山でのプロジェクトの再開。双務的な南北経済交流と枠組み作りと事業の開始。それを支える制度的インフラ整備。ハードインフラを含む各種投資
- 日本: 拉致問題を含めた懸案問題の解決と外交関係の樹立と日朝平壤宣言で規定されている経済支援の開始、民間ビジネスの復活と推進

27

## 今起こっている変化は

- 冷戦終了時に起こるべきであった変化のうち、未成の部分が変化し始めたもの
  - 米国は北朝鮮が「いつか崩壊する」と軽視する態度から自国の安全保障上の問題と認識を変化
- 新たな平和と繁栄の時代のための「産みの苦しみ」
  - 問題解決を通じて、北東アジア各国が相互理解と協力を増進していく必要

ご清聴ありがとうございました